

No. **18**
2006.Dec.



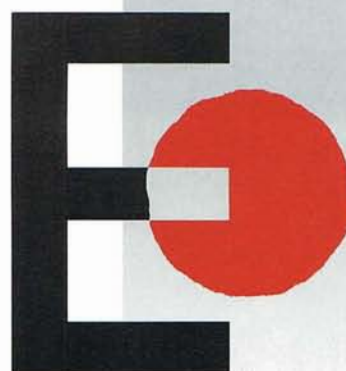
イベント学会 2006年度敦賀大会シンポジウム

ユーラシア大陸と 日本海の新しい関係



CONTENTS

プログラム/開会挨拶 河瀬一治	P2
大会実行委員長挨拶	P3~4
『市民ヒューマニズムが創る、世界一の感動都市・敦賀』 ～人・心・交流のイベント～ 望月照彦	
研究発表	P5
『地域づくりとイベント戦略』 政所利子	
基調講演	P6~7
『ユーラシア大陸と日本海の新しい関係』 堺屋太一	
パネルディスカッション	P8~11
『イベントと21世紀の敦賀の創造』 北本正孟/河瀬一治/小牧由章/多仁照廣/井上 脩/ 小川雅人/岸本 昇/望月照彦/政所利子	
インフォメーション	P12



イベント学会会報「イベントロジー」
EVENTOLOGY

2006年度敦賀大会シンポジウム プログラム

2006年10月27日、イベント学会の2006年度敦賀大会シンポジウムがプラザ萬象にて開催され、参加者は505名になりました。敦賀市は今年10月のJR直流化を契機に、独自の歴史や地勢を基盤にした観光都市を目指して歩み始めている。「敦賀市直流化開業記念イベント」の一環として、行なわれた今大会のテーマは、「ユーラシア大陸と日本海の新しい関係」。地域活性・まちづくりの専門家や研究者、敦賀市の関係者が多数集まり、新たな観光都市の構築に向けて活発な議論が展開された。

- 12:30 … 開場
岩崎 博 総合司会・日本イベント産業振興協会主任研究員
- 13:00 … 開会挨拶
河瀬一治 敦賀市長
- 13:05 … 大会実行委員長挨拶
『市民ヒューマニズムが創る、世界一の感動都市・敦賀』～人・心・交流のイベント～
望月照彦 イベント学会副会長
- 13:45 … 研究発表
『地域づくりとイベント戦略』
政所利子 まちづくりコンサルタント・株式会社代表取締役
- 14:30 … パネルディスカッション
『イベントと21世紀の敦賀の創造』
【モデレーター】
北本正孟 イベント学会副会長
【パネリスト】
河瀬一治 敦賀市長
小牧由章 敦賀商工会議所副会長
多仁照廣 敦賀短期大学地域総合研究所長
井上 脩 日本海地誌調査研究会会長
小川雅人 福井県立大学地域経済研究所助教授
岸本 昇 (社)敦賀観光協会事務局次長
【オブザーバー】
望月照彦 イベント学会副会長
政所利子 まちづくりコンサルタント・株式会社代表取締役
- 16:15 … 基調講演
『ユーラシア大陸と日本海の新しい関係』
堺屋太一 イベント学会会長
- 17:05 … 閉会挨拶
森 隆一 イベント学会副理事長

イベント学会とは

イベント研究者のみならず、さまざまな分野の研究者、技術者、専門家や実務者が経験や知識の多少にかかわらず参加し、積極的な相互作用を通じて「異質な知と技能のメルティング・ポット(るつぽ)」となる学会です。

多様な専門、異なった立場から提示される知識、ノウハウ、経験がときに競合し、干渉しあい、やがてそれらが共鳴、交響して、創造的に共同成果を生み出すような機会と場を創り出すこと、それこそがわれわれのめざす新しい学会です。

開会挨拶



敦賀市長
河瀬一治

敦賀市は大変古い港町でございます。日本の一番古い港は、1700年位前にはすでに港として機能していたようですが、敦賀の港は日本で二番目に古い港であったと聞き及んでいます。このことから、敦賀は古くから交通の要所であったということで、早くから鉄道網も発達を遂げてまいりました。

もっとも、電車への送電方法は「直流」と「交流」というものがございまして、私どもの地方は「交流」でございました。ところが、都市部では、「直流」が多く、相互乗り入れは困難を極めていました。この状況を国、県、民間そして市民の皆様方、多くの力を頂き、10月21日に待望の直流化が実現し、京阪神から直接快速電車が乗り入れたわけでございます。

敦賀のまちづくりの指針に「世界とふれあう港まち・魅力あふれる交流都市、敦賀」というものがあります。この直流化を大きなチャンスとして捉え、今まで以上にまちづくりを進めようとして取り組んでいるところでございます。

本日は、イベント学会の方と特に、その歴史、ユーラシア大陸との結びつき等を様々な観点、考え方の中から議論頂く予定です。様々なお話を新たなまちづくりの契機としたい、そう考えております。皆様方には力強いご協力を心からお願い申し上げる次第です。



会場となったプラザ萬象。多くの市民がつかめた

市民ヒューマニズムが創る、世界一の感動都市・敦賀

～ 人・心・交流のイベント～

イベント学会副会長 望月照彦

世界に誇る敦賀の宝とは、何でしょうか。私は、「市民ヒューマニズム」ではないかと考えています。

1年前、私は敦賀市立博物館で1枚の写真に出会いました。敦賀の子供とポーランドの孤児が手を繋いで並んでいるワンカットです。1920年代、シベリアでは、ポーランド人孤児が500人以上流浪していました。ツンドラの厳しい環境のなか、過酷な生活を強いられた孤児たち。その子供たちを優しく迎え入れたのが、敦賀だったのです。青い目と金髪を持った子を見たら石を投げるような社会情勢のなかで、敦賀の人たちはポーランドの子供たちを温かく受け入れた。なんてこの地域の人たちは心が豊かなのだろう。私は、1枚の写真の前からしばらく動くことができなかつたくらい、大きな感動を覚えました。

敦賀には、在リトアニア外交官の杉原千畝さんがユダヤ難民を救った「命のビザ」の逸話も残されています。杉原さんは、1940年代前半に、リトアニアに逃亡してきた6000人以上のユダヤ人難民に日本への入国ビザを発行し、脱出の手助けをしました。その時、命からがら逃れてきた彼らを受け入れたのも、敦賀でした。先日、敦賀に逃れた一人であるユダヤ人のラビ(ユダ

ヤ系の指導者)の話が、日本経済新聞に載っていました。曰く、「敦賀では、地元住民から温かい炊き出しでもてなされた。我々はこの恩を一生忘れない。ユダヤ民族は5000年後の子孫も、必ずこの恩義を覚えているだろう」。この話からも、敦賀市民の素晴らしさが伝わってくることでしょう。

●ユーラシア大陸を結ぶ 「小さな国際都市・敦賀」

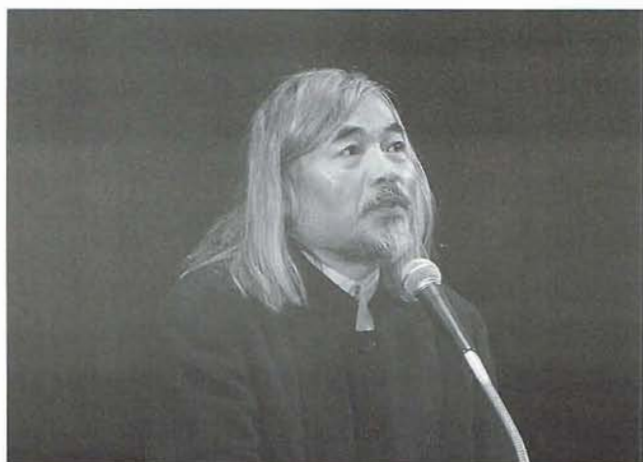
なぜ、敦賀がホスピタリティにあふれた都市になったのか。その理由は、歴史的に人々の交流拠点であったことが挙げられます。

市長さんのお話にもあったように、敦賀は、地政学的に見て大変重要な位置にあったことから、1000年以上前から小さな国際都市として栄えていました。明治33年に交易港として指定され、明治45年に東京・敦賀間を結ぶ欧亜国際連絡列車が開通すると、いっそう大勢の外国人が敦賀を玄関に日本へとやってきた。外国から来た方がこの町にあふれていたわけですから、ロシアとの交易を進めた下村房次郎さんのように、素晴らしい敦賀の起業家が、大きな志と夢を抱いて、世界へと飛翔していきました。

このように、人々が集まり行き交う都市であったからこそ、おもてなしの心が、敦賀市民の間に必然的に培われていったのでしょ

この歴史のなかで培われた「ヒューマニズム都市・敦賀」こそが、21世紀の敦賀が掲げるべきテーマではないでしょうか。町を歩けば、そのようなDNAが地下水脈のように残されています。この地下水脈をもう一度ボーリングして湧水させ、その思いを一人ひとりが受け継いでいく時代が来た、と私は思うのです。

東京-敦賀-ウラジオストック-モスクワ-パリ-ロンドン。欧亜国際連絡列車によって、敦賀は世界の大都市を繋ぐ要所となっていました。政治家も経済人も芸術家も、皆、このルートから世界と交流していた



●Profile / もちづき・てるひこ

1943年静岡県生まれ。日本大学理工学部大学院卒業後、民間ディベロッパー等を経て独立。79年望月照彦研究所設立、89年より多摩大学経営情報学部教授(現在は大学院教授を兼任)。産業観光戦略、産業振興等、行政・民間のプロジェクトを多数手がける。

わけです。昭和30年代の話ですが、建築家の安藤忠雄さんも、飛行機に乗るお金がなかったことから、このルートでヨーロッパを見に行くと聞きました。

再び私たちは、ユーラシアの時代を迎えています。この欧亜の経路は重要な役割を担うようになるでしょう。今の敦賀は大都市をつなぐ要所とはいえませんが、もう一度、ユーラシア大陸と敦賀を結ぶ、活気あるヒューマンウェイを取り戻すことができるのではないでしょうか。

先日のJRの直流化は、単に、関西・関東から大勢の観光客を集められるだけではありません。「鉄道だけでなく、心の直流化」「国内だけでなく国際的な直流化」。この二つの意味があると思うのです。この直流化は、小さな国際都市・敦賀を再興させる最大のチャンスであり、敦賀ヒューマンイズムが世界へヒューマンウェイを開通させる最大のチャンスだといえるでしょう。ヒューマンイズムの伝統という敦賀の財産によって、「感動観光」を生み出す絶好の機会なのです。

●敦賀が創造する

「21世紀の欧亜国際連絡列車=ヒューマンウェイ」

「ヒューマンウェイの創造」。イベント学会では、敦

賀の皆さんに、このような提案をいたします。

敦賀港湾の活性化、中心商店街や市街地などの都市型地場産業の再生……。そして最大のテーマは、「21世紀の欧亜国際連絡列車をつくる」ことでしょうか。ただし、ツーリズム企画としては、1週間以上シベリア鉄道に乗ることが難しいことから、実現する可能性が低い。そこで、新しい視点として、ユーラシア大陸をネットワークする「世界中の人々の心を繋ぐ道づくり=ヒューマンウェイ」をご提案いたします。

市民の皆さんが主役となり、市民ファンドをつくる。その基金を使い、行政の支援を受けながら、市民交流、文化交流、歴史交流を仕掛けていくわけです。

例えば、トルコで世界子供大会が開催されていますが、敦賀でも、子供たちを救った歴史を生かし、こうした催しができるのではないのでしょうか。欧亜国際連絡列車を通じて、ユーラシアの子供たちが敦賀に集まり、国や地域の未来を語り合う。世界の子供たちの合唱コンクールや演劇祭も考えられるでしょう。

敦賀には、食文化や歴史文化などの文化観光や産業観光などの観光資源がたくさんあります。それらと、感動観光・おもてなし観光を組み合わせれば、魅力的な「ヒューマンイズム観光」を生み出せるはずです。

ポーランド孤児をもてなした敦賀市民

1920年当時、シベリアでは、約20万人ものポーランド人捕虜が重労働を強いられていた。飢餓や病気で死者が続出し、多くの子供が孤児となったという。その時、ポーランド人が結成した「ポーランド救済委員会」の孤児救助要請を唯一引き受けたのが、日本政府だった。孤児たちは日本赤十字社の手で敦賀に到着。敦賀では、温かい食事や栄養剤、新しい衣服などの歓待を受けたという。



ポーランド孤児と敦賀の子供たちは心を通い合いました。その当時に写された貴重な一枚

ユダヤ人難民の幸せの港

* 第2次世界大戦の開戦後、ナチスの迫害から逃れリトアニアに辿り着いたユダヤ人難民。リトアニア領事代理の杉原千畝氏は、政府の意向に背き、安住の地を求める彼らに、数千枚の日本通過ビザを発給した。「日本のシンド



「日本のシンドラー」と呼ばれた杉原千畝氏

ラー」の尽力により、6000人以上のユダヤ人難民が敦賀に辿り着いた。温かい食事を提供し、夕夕で銭湯を開放する……。



ポーランド孤児の時と同様に、敦賀の人々は難民たちを温かくもてなしたという。

ユダヤ人難民がたどりついた旧敦賀港駅舎。歴史PR館として現存している

地域づくりとイベント戦略

まちづくりコンサルタント・(株)玄 代表取締役 政所利子

タクシーの運転手さんに「どこか面白いところは？」と聞いても「とくに何もない」と返ってくる……。そのような町が全国各地にあります。しかし、そうした地域を含めて、地域の方々が工夫を重ね、やがて元気になった事例は、たくさんあります。

まず、ご紹介したいのは、北海道の帯広市です。帯広では、商店街の青年たちが活性化を図り、お金を出し合って、屋台村をつくりました。この魅力は、ホワイトアスパラ、新鮮な牛肉、生で食べられるとうもろこしなど、これまで幻とされていた地元の産品が食べられること。実は、屋台村開店まで、これらは東京の築地に卸されていて、地元には流通していませんでした。生産者も食べている人の顔や調理方法が見えないので、誇りが持てない状態だったのです。地元の人もその美味しさを知らなかったのです。ですから、屋台村ができてみるとまず地元客で大盛況になりました。それを見て、観光客も「地元客が集まっているなら美味しいに違いない、価格も安心納得」と集まるようになったのです。地元客を集めることで、結果的に観光客集めも実現した「結果観光」の成功例といえるでしょう。

大分県の豊後高田市も、町おこしの好例です。この市は、敦賀と似ています。国東半島一の交易の拠点でしたが、近年はすっかり元気をなくしていました。しかし、自分たちの町をよく見直してみると、昭和30年代以前の建物が残っており、懐かしい昭和の佇まいがそのまま残っている、と気づき、『街を丸ごと昭和博物館にしよう』と考えたのです。呉服屋は蔵から立派なお宝を出し、電器屋は古いテレビを持ち出して画面で当時のビデオを上映する、などと「一店一宝」で展示施設を設けました。その結果、今では大変な人気を呼ん

でいます。多くの町で「魅力的な集客装置がない」とよくいわれますが、豊後高田市を例に見ると、「集客装置は皆で知恵を出し創出する」「今や人々の暮らしの息づかいが読みとれるものに人気が集まる傾向がある」ことがよく分かります。

敦賀は宝がたくさんある町 「敦賀北国街道玄関作戦」を

ひるがえって、敦賀はどんな町でしょうか。

私は、他地域の人たちから見れば宝がたくさんある「宝箱の街」だと思います。なんといっても美味しい郷土食がたくさんある。鯛寿司、かまぼこ、昆布、ラーメン、敦賀ふぐ、かたパン…。私の両親の故郷は福井です。訪れるたび、かまぼこや小鯛の笹漬けなど故郷の産物、お宝を買って帰ります。“街歩き”を誘うならば、こうした名産品をつまみ食いできる『場』を街の中につくる。そして「つまみ食いマップ」を配れば、より魅力的な町として伝播されるでしょう。

さらに私が素晴らしいと思うのは、金ヶ崎宮です。信長、秀吉、家康、利家が勢揃いしたという歴史的舞台と出来事資源は、全国を見渡しても類はありません。ご提案したいひとつは、歴代の名将が集まった当時、召し上がったと思われるお茶やお菓子など『タイムスリップの手掛かり』を復元すること。敦賀に研究会ができれば、ぜひ私も参加させていただきたいと思います。

敦賀は品格と風情があります。「敦賀北国街道の玄関作戦」としてさまざまな仕掛けができる町です。そのためには、まず地元の方が敦賀の魅力を検証し奥深く知ること。町のことを知るきっかけづくりのイベントを仕掛けるのもまちづくり作戦の一つでしょう。



写真左/「昭和の町」豊後高田市。もともと残っていた建物を生かして、「どこかホッとする昭和の街並み」を復元した 写真右/豊後高田の街並みを、心を込めて案内するボランティアガイド。現在ではガイドが数十名も育成レベルを上げるべく日々研究を深めています。こうしたソフト面の取り組みが大切です

●Profile/

まんどころ・としこ

東京都生まれ。跡見学園短期大学卒業後、オートクチュールデザイナー、環境計画プランナーを経て98年株式会社玄を設立。首都圏内をはじめとしたまちづくり計画業務や、全国市町村における地域産業振興などの研究・調査及び起業塾ビジネスセミナーなどを主要業務とする。



ユーラシア大陸と日本海の新しい関係

イベント学会会長 堺屋太一

チンギス・ハンから考える ユーラシア大陸

現在、私は日本経済新聞の朝刊で、『世界を創った男チンギス・ハン』という連載をしています。チンギス・ハンはユーラシア大陸と深くかかわりがあり、研究をすすめるうちに、次第にユーラシア大陸と日本の関係性ということを考えるようになりました。

かつて日本海側が「裏日本」と呼ばれていたことがありましたが、ユーラシア大陸という観点から見れば、日本海側が「表日本」のような気がしてきます。たとえば、マルコ・ポーロはフビライ・ハンの時代にベニスから陸路を通してモンゴルにやってきました。当時の日本は、ユーラシア大陸とは、シルクロード、渤海という国を通じて文化交流がありました。

ところが、マルコ・ポーロが17年後に帰国する際は、船で帰ります。この17年間で陸よりも海路の方が便利になった。この時からユーラシア大陸と日本列島の関係は、海から来る、つまり太平洋から来る関係に変わり、太平洋側が「表」に変わったんですね。

しかし、現在は飛行機によって陸路も海路も関係なくなりました。また天然ガスをはじめとするパイプラインが、国境を越えて次々と敷設されるようになり、再び陸路が重要になってきました。もっとも日本列島だけが、パイプライン網から孤立しています。これが将来

どうなっていくのか。もし、日本も参加すれば、再び、日本海側が表になるかもしれません。そうなれば、敦賀は、再び、ユーラシアとの窓口として浮上してくるわけです。

全国の地方都市を規格化した理由

敦賀に限らず、日本の地方都市は、どこも非常によく似ていて、他の都市や他の国の人が、わざわざ訪れたいと思うような個性や魅力に欠けています。その理由は、昭和16年に策定された、日本の地方都市を全部同じにするという政策が影響しているからです。

当時は戦争に勝つため、戦後はより豊かになるために、政府は少ない労働力で少ない資源を使って、できるだけ大量のものを作る規格大量生産が必要だと考えました。そのための方策の一つが有機型地域構造です。有機型、つまり日本列島を人間の体のように見立てたわけですね。人間の体なら頭脳は一つです。そこで、首都東京以外では、頭脳労働をすることは決めました。頭脳を一つにすることによって、東京でコマースを流したら、北海道から沖縄県まで同じ商品が流れる。こう考えたわけです。

それでは、頭脳活動とは何かといえば、まず第一が産業経済の中核管理機能。だから大企業の本社、証券取引所、研究所、また各業界の産業団体の本部などは、全部、東京に置かなくてはならない。

第二は、情報発信機能。情報発信機能には、紙と電波がありますが、紙については、書籍取次店を東京に集中させました。だから福井県で印刷したものを、お隣の石川県で売るためには、一回東京を経由しなければならない。その結果、県境を越える出版物の99.8%は東京に集中しています。こんな国は日本だけです。

電波については、キー局システムをつくりました。地方の局は、全部、どこかのキー局につながれ、そこ



●Profile／

さかいや・たいち
1935年大阪府生まれ。東京大学経済学部卒業後、通産省入省。日本万国博覧会、沖縄海洋博覧会などを手がける。1998年から2000年まで経済企画庁長官。現在、早稲田大学日本橋キャンパス学督。作家。

から番組をもらう仕組みです。地方局で制作した番組を全国に流したい場合は、東京の地方担当ディレクターのところに陳情に行かなければなりません。

そして3番目。これがもっとも重要なことですが、文化創造活動は、東京以外では禁じました。たとえば歌舞伎をきちんと上演できる歌舞伎座は東京にしかない。大阪の歌舞伎座をわざわざ潰し、その過程で関西歌舞伎が消えました。体育館でも、格闘技専門体育館は、東京にしかありません。シンフォニーホールも、東京以外では、大阪に一つあるくらいです。

その代わり、地方には多目的ホールをつくりました。多目的ホールでは、歌舞伎の花道が作れないし、格闘技のためにいちいちひな壇を組まなければならない。オーケストラが演奏すれば、バイオリンの音が上に抜けてきちんと聞こえない。本当に文化活動に携わりたい人は、東京に行かざるをえないわけです。

一方、地方の自治体に対しては、何も考えずに農業や製造業など手足の機能で頑張ることを期待しました。そのために、工場誘致をしたり、建設業に補助金を出したりしました。

この結果、地方から企画力や独自性が失われていきました。地方博では、みな、東京に企画を頼んだから、同じものをつくり、一斉に失敗しました。

地方自ら企画力を持ち、 日本に唯一、世界に唯一を探す

90年までは、税収も増えていたし、工場誘致も進んでいたから問題はありませんでした。ところが、90年代以降、世界のビジネスモデルはすっかり変わりました。規格大量生産は、低賃金国が担うレベルが低い産業になりました。

地方が企画力を取り戻す必要性にいち早く気づき、実施された施策が、竹下登さんの「故郷創生」です。誰も指導せずに、地方自治体に1億円の使い道を考えさせれば、地方にも頭脳ができると思ったわけです。ところが、マスコミは、「東京が命令しないことを地方にやらせるとはけしからん」と猛烈に批判いたしました。そうした姿勢は、今でも変わりません。つい先日も、ある地方都市が、多目的ホールではなく、きちんとした劇場をつくって個性を出そうとしたら、マスコミか

ら猛烈な批判を受けていました。

依然として、全国を有機的にしようという発想がありますから、個性豊かな施策を実行すれば、国からもマスコミからも、決していい顔はされません。しかし、顔色ばかり見ていれば、地方の振興などいつまでたってもできません。

世界の中で、最も成功している都市の一つは、ラスベガスです。今や国際会議の誘致はラスベガスの一人勝ちです。また、ドイツのバイロイトは、ワーグナーのオペラを完璧に演奏できる世界唯一の劇場、「祝祭劇場」を持つことで、一流の演奏家がお金を払ってでも演奏したい都市になりました。日本では、沖縄県が日本唯一の海洋リゾートというコンセプトを打ち出すことで、日本一の観光県にのし上がりました。

このように、世界で一つ、日本で一つの名物、どこにも類似品がないことを考えることが重要です。

幸い、この敦賀には原子力という大変有力なものがあります。原子力商店街、原子力遊園地…。こんな風に原子力を生かした世界唯一の名物がつくれるのではないかと考えています。また、世界中から人がやってくれば、関西電力も、絶対に事故が起こせなくなるでしょう。

名物を作ることで、頭脳も資本も流入してきます。こういう発想法が、イベントオリエンテッド・ポリシー。イベントを元にした誘致政策です。子供や孫の時代に故郷を世界一の街にする。国家の命令ではなく、地方の発想で、このようなプロジェクトに立ち向かい、ユーラシア時代の窓口として、再び君臨していただきたいと思います。



- コーディネーター 北本正孟 イベント学会副会長
- パネリスト 河瀬一治 敦賀市長
- 小牧由章 敦賀商工会議所副会頭
- 多仁照廣 敦賀短期大学地域総合研究所長
- 小川雅人 福井県立大学地域経済研究所助教授
- 井上 脩 日本海地誌調査研究会長
- 岸本 昇 敦賀観光協会事務局次長
- オブザーバー 望月照彦 イベント学会副会長
- 政所利子 (株)玄代表取締役



イベント学会副会長
北本正孟(きたもと・まさたけ)

1956年同志社大学法学部卒業。株式会社カントリー代表取締役。万国博覧会フランス館をはじめ、イベントプロデューサーとして数々のイベントを手がける。



敦賀市長
河瀬一治(かわせ・かずはる)

1951年生まれ。日本大学商学部卒業後、83年より敦賀市議会議員を2期務め、91年より福井県議会議員を務める。95年敦賀市長に当選し、現在3期目。趣味はギター、現在もバンドを率いて市内外のイベント等に出演している。

北本 敦賀のさらなる発展と創造を視野に入れて、その可能性とアイデアを提案いただけますでしょうか？

河瀬 敦賀は古くから大陸との交通の要所で、その地名も、一説では、朝鮮半島の任那の王子「都怒我阿羅斯等」(つぬがあらしと)が渡来したことにちなんで、「角鹿」(つのが)と呼ばれたと言われていいます。これが、700年頃には、「敦賀」となったそうです。

なぜ、この字に変わったのか？ 実は「敦」には「手厚い」の意味が、「賀」には「慶びあう」という意味がある。大陸からの玄関口として人々を手厚くもてなし慶び合ってきた……。そんな風土と歴史が、

この名の由来になったのではないのでしょうか。

名は体を表すものです。先人の血を受け継ぎ、人々を温かく迎え、手厚くもてなす。その気持ちを前面に出していくべきだと考えます。特に最近、人と人との繋がりが見直され、心の時代とも言われています。もてなしの心を前面に出したまちづくりは大いに地域の、人々の活性化に繋がっていくと確信しています。このことを充分認識し、まちづくりに取り組みます。

小牧 商工会議所という立場から少し辛口に申しあげますと、敦賀は「観光面では非常に中途半端な町である」と言わざるを得ません。気比神宮や金ヶ崎宮、西福寺などはありますが、集客力の高いメジャーな観光施設、目的地があるとはいえない。ポーランド孤児やユダヤ難民の方々も、確かに敦賀に迎えました「通過点でしかなかった」面もあるのではないのでしょうか。

もっとも、食の分野でいえば、相当に自信をもってお勧めできる町です。敦賀ふぐ、甘鯛、昆布、蒲鉾と特産品は数多

パネルディスカッション

『イベントと21世』

敦賀市とは……



敦賀市は、福井県の中央、琵琶湖の北方に位置し、北に敦賀湾口を開いて日本海に面した港町だ。人口は6万9301人(平成17年)。市域面積は250.68平方キロメートル。かつては日本海交易の中心都市として栄えた歴史ある町でもある。

中心市街地は、JR敦賀駅と敦賀本港という2つの玄関口を持ち、交流・交易の中心として賑わった歴史を蓄積している。気比神宮、歴史博物館といった歴史文化資源を持ち、日本三大松原の一つである気比の松原や、国立公園にも指定された美しい海岸線もある。最近アーケ

いし、お水もお米も非常に美味しい。食を軸に捉えた集客も十分に考えられるはずだ。

ただし、そのためには問題が二つある。敦賀は夜型の町ですが、今後は観光客の方々がお昼に美味しい食を楽しめるようなお店をどんどんつくるべきです。もう一つは笑顔と共に伝える「ありがとうございました」「おおきに」の一言。飲食店にしろ土産物屋にしろ、これができないお店が少なくない。先ほど「感動」や「心の時代」というお話もありましたが、どんなに良い施設や商品があっても、笑顔や挨拶の印象が悪ければ、思い出は台無しになるものです。もてなしの基本ともいえる、こうした面をしっかりと浸透させること。まずはそこから始めるべきではないでしょうか。

敦賀に息づく豊富な資源 再発見して、伝えるべき

多仁 東京から敦賀に来て20年が経ちましたが、ここに来て間もない頃、漁師の方々にハタハタの刺身をいただき驚いた感動を、昨日のこのように覚えていま

歴史、人、食、産業——。敦賀が持つ有形無形の資源にはどんなものがあり、どんな活用法が考えられるのか？ 国際交流人口を増やし、未来の敦賀の創造に繋げるべく、地元の識者を中心に活発な議論が交わされた。

す。刺身といえば築地と思っていたけど、そのハタハタは、これまで食べた中で一番美味しかったのです。

また冬に短大へ行くためクルマで西浦の道を走ると放射冷却の起こった朝は、敦賀湾に湯気が立つのが見えます。気比の松原あたりで幾筋もの雲となり、上昇気流で天空に上る。その様は龍のような美しさです。

今日お集まり頂いた方々の中で、ハタハタのお刺身を食べたことがある人はどれくらいいらっしゃるのでしょうか？ 敦賀湾に昇る龍の姿を見た方は？

敦賀の方でも、敦賀のことを十分には知らないものです。現在福井県では「平成ふくい風土記」という仮称で、新たな福井の風土記を編纂しようという試みがはじまっています。そこで私は、風景人の心、そして産業まで含めて「景観」について編纂しようと提案しています。例えば敦賀にも自然とそこで生活する人々が織りなしてきた様々な景観が溢れている。それを再び見つけ出し、新たな挑戦に繋げようというわけです。こうした試みがさらなる町の魅力づくりに、そして

誇りを培うことに繋がるのではないのでしょうか。

小川 福井に赴任してからまだ3年と新参者ですが、「福井ほど環境条件や地域資源、地域財産が豊富な場所は無いのではないか？」と思えるほど恵まれた土地です。ところが、地元の多くの方は「そうかな？」とおっしゃるんですね。当たり前のことになりすぎて、その魅力に気付い



敦賀商工会議所副会頭
小牧由章(こまき・よしふみ)

1952年福井県敦賀市生まれ。大阪商業大学商業科卒業。92年より株式会社小牧取締役社長。同年、敦賀商工会議所常務議員を経て、01年より現職。03年より敦賀観光協会副会長も務める。



敦賀短期大学地域総合研究所長
多仁照廣(たに・てるひろ)

1948年東京都生まれ。中央大学大学院文学研究科博士課程。国税庁税務大学校租税史料館研究調査員を経て87年より敦賀短期大学日本史学科教授に就任。併せて04年より敦賀短期大学地域総合研究所長を務める。

『紀の敦賀の創造』

ードの一部に屋台が出現する「ラーメン街」も有名で、京阪神や中京方面からも訪れる人も多い。2006年10月の新快速直通化によって、さらに観光客が増えることが期待されている。

もともと、近年の車社会化の影響で商業店舗や居住機能が郊外化。かつての賑わいを失った中心市街地の活性化は、長らく課題となっている。

また、若狭湾沿いに原子力発電所が集中するため「原発銀座」として有名で、エネルギー供給都市としての側面を持つ。伝統産業の昆布加工は全国の80%以上のシェアを占めている。



敦賀港に残るレンガ倉庫。夜はライトアップされ、市民の目を惹きつける。



赤松、黒松約1万7000本が生い茂る「気比の松原」。夏は海水浴場になる。



敦賀駅前から続く商店街を望む。漫画家松本零士氏の漫画キャラクター像が並ぶ。



港にある敦賀きらめきみなど、イベントホールとして市民に開放されている。



福岡県立大学地域経済研究所助教授
小川雅人(おがわ・まさと)

1947年生まれ。東京経済大学経営学部卒業後、東京都商工指導所を経て、法政大学社会学部兼任講師、千葉商科大学商経学部、東京経済大学経済学部の非常勤講師を務める。03年より現職。

ていない面があるようです。

私の専門は「商業経営」と「まちづくり」です。この分野では、歩いて通えるまちづくり、地域の中で生活し、地域の中で経済を循環していくコンパクトシティの考え方、ライフスタイルが注目されています。そのためには「地産地消」はもちろんのこと、地域の産物を地域の中で商う「地産地商」の考え方が不可欠。非常に豊富な地域資源や財産を、外はもちろん内部にもっとPRする必要があるわけです。重視すべきは「口コミ」です。「コレが良い」と知人、友人に伝えることは、自分の信用にも強く関わります。本当に良いものしか伝わらず、地域興しには非常に効果を発揮します。そのためには「敦賀の良いところはこれだ!」と共通の認識を持ち、敦賀から情報発信していくことが不可欠。地域の宝を見つめ直し、共有すべきです。

日本各地でまちづくりに成功している実勢調査を見てきましたが、成功している町には、共通点があります。それは「地域の人がそこでの生活を誇りに思っ



日本海地誌調査研究会長
井上 脩(いのうえ・おさむ)

1926年福井県敦賀市生まれ。旧国鉄を定年退職後、敦賀市教育委員会の嘱託として、市民憲章、県民指標の普及啓発、ふるさとづくり運動の推進に関する業務や敦賀市教育史編纂に携わる。

いる」こと。恵まれた観光資源に気づき、それを共有し、プライドを持って外に伝える。こうした流れを生み出すことが、今後の敦賀の課題だと思います。

歴史から学んだ産業観光 「遊敦塾」を起爆剤に――

井上 私は敦賀に生まれ敦賀に育ちましたが、30年ばかりは金沢で貨物輸送市場の分析などを仕事にしておりました。いま敦賀をみると、私が金沢に赴任した昭和25年頃と非常によく似ている気がする。つまり、これから観光都市として伸びる要素があるということです。

もっとも、どう伸ばしていくのか? しっかりとした方向性と考え方が不可欠です。私は歴史を活用すること、先人たちの足跡を再現するべきだと考えます。

敦賀は約2000年前から大陸との取引が盛んに行われていました。日宋貿易の頃は博多と共に敦賀の港が日本側の拠点でした。戦前の頃は欧亞連絡と鮮満貿易で、非常に栄えていました。地政学上からみても関西地域や中京地域の頂点に立

つ中央点にあり、同時に大陸からみたときも中央点に敦賀が捉えられます。だからこそ敦賀には情報が入り、またそれを元に発展できたわけです。こうした歴史を現代に活かし、敦賀は大陸に向けた物流の



敦賀観光協会事務局次長
岸本昇(きしもと・のぼる)

1959年敦賀市生まれ。中央大学法学部卒業後、JTB入社。同社高松、福井、岐阜、名古屋支店を経て06年より現職。

基地として、栄えるべきではないでしょうか? 私が提唱し続けているのは、敦賀に大物流加工センターをつくること。そしてそれを観光に活かすことです。ただ見て、食べて、良い景色を満喫するような従来型の観光から、現在は見て、体験する産業観光の方向に変わっています。歴史から学びつつ、物流と観光を結び付ける。それがこれからの敦賀の生き方ではないでしょうか?

岸本 新たな体験型観光の施策として、観光協会と敦賀市では9月から実験的に「遊敦塾」をスタートさせています。よく言われる体験型観光ですが、これまで点でしかなかった活動を線や面にしようという試み。

例えば、舟釣り、筏釣り、地引き網は、これまでも観光ビジネスとして実施されているところはあった。ところが、釣りが終われば「大変でしたね」で終わりだった。それを「遊敦塾」では、釣った魚の履き方や料理法を、漁師の方や民宿の女将さんたちから直接教わる。立体的な知識が得られるうえに、たくさんのふれあいが生まれるというわけです。先ほど皆さんから「おもてなし」「心のふれあい」、さらに「産業観光」というお話がありましたが、まさに遊敦塾が、それらの担い手となる。敦賀の観光=「遊敦塾」というまでに育てたい。また井上先生が仰っていた産業観光の起爆剤にも繋がるのではないのでしょうか。産業観光についてはもう一つ提案させてください。敦賀は原子力はもちろん、火力も水力も風力による発電所もある。「エネルギーの町」という切り口でも、他にはない魅力を産業観光として訴えていけると考えています。



オブザーバーとして参加した望月氏(左)と政所氏(右)

「さんしょくひるね」が 風情のある港をつくる

小川 都市は、交通体系によって大きく変容します。今回のJR直流化によって、近隣の都市との交流が促進されます。しかし、注意すべきは、同じような町を志向しては、規模が大きいほうに必ず吸収されていくということ。リトル東京やリトル大阪をつくっては地域の個性が無くなり、町が疲弊していきただけです。個性や役割を明確にしたうえで、そこに住むすべての人が生活することに誇りを持つような町を目指す。「自分たちが町の印象を変えるんだ」と町を愛する意識を育むことが出発点かな、と思っております。

井上 今の敦賀は市の中心部のドーナツ化現象が進み、生活コストも高くなるばかりです。市民の皆さんが、町の中へと足を運ぶようになれば、自ずと敦賀の活性化に対する知恵も集まってくるのでは？

河瀬 今回のイベント学会敦賀大会ではさまざまなご提案をいただきましたが、それを市民の皆様と実現させていくのが、市長である私の仕事だと思っております。提言を具体的な施策として実施、同時に3ヶ月毎に検証して、さらにステップアップしていきたい。

北本 時間が近づきましたので、最後に皆様のお話を加味したうえで「さんしょくひるね」という言葉をキーワードとして提案させていただきたいと思っております。「さんしょく」とは食と職と触の三つ。皆さん触れていましたが、敦賀の美味しい「食」は非常に魅力的なもの。これは大変な観光資源です。次の「職」は職人のような、観光に関して誇りをもって案内する名人が非常に大切です。最後の「触」もみなさんがおっしゃった参加体験の提供が大いに人を惹き付けます。

さらに「ひるね」の「ひ」は人づくり。「る」はルートづくり。「ね」は寝床づくりを表します。絶え間なく人材を育て、敦賀以外の北陸の各都市と連携するルートをつくり、ゆっくり休める宿を用意する。こうした面もしっかりと整備していくことが、いらっしゃる方へのおもてなしに当然繋がっていくものです。

港という字は「さんずい」に「巷(ちまた)」と書きます。私はこの「巷」が無くなったことが、いま、港を寂れさせているのではないかと、風情を無くさせているのではないかと、思っております。機能だけではなく風情のある港を取り戻していただけるよう、また皆さんの力で敦賀の町が今後益々楽しく、栄えていくことを祈念いたします。

イベント学会名誉会長 木村尚三郎先生を偲んで

平成18年10月17日、イベント学会初代会長の木村尚三郎先生がお亡くなりになられました。生前、故人と親しかった望月照彦副会長から、下記のような追悼文をいただきました。

「ふりかえれば、在不在」

ソフトで洒落な、それでいて深い含蓄のある木村先生の話し言葉が、今でも耳の奥で囁いている。教室で先生の講義を受けた弟子ではないが、幾つかの講演を聴くといつの間にか弟子のような気分になったのは、私だけではないだろう。発想や考え方の基本といったものに私は大きな影響を受けた。それは先生が、常に豊富なアイデアをお持ちになっていたが、それ以上に文明論・文化論の根底にある強靱な思惟の存在を大切にしていたからである。脆弱になった現代人の「野生の思考」に活を入れ続けていたのであろう。

先生の著作に『ご隠居のすすめ』というものがある。心のどこかに隠居願望があったから書かれたのであろうが、実のところ世間がそんなことを許さなかった。それどころか、いつの間にか社会の大きな変動を巻き起こす先端にいて、豊かな思念と行動を現示した。しかしそのエネルギーが先生の命を縮めたことも確かだ。お祭やイベントをこよなく愛した先生の、その哲学と実践の見事な結晶作用の秘密を問いただそうと、ふりかえっても、もう在不在。

多摩大学大学院教授 望月照彦



2006年10月17日没 享年76歳

パネルディスカッション

『イベントと21世紀の敦賀の創造』



—— 研究助成対象が決まりました ——

2006年度イベント学会研究助成は10月末に締め切り、7件の応募がありました。11月27日(月)の午後3時から、研究推進部会(野川春夫委員長以下4名)で審査の結果、高田佳子氏の「地域保健事業推進者へのイベント教育導入に関する可能性の検討」が助成の対象となりました。

研究成果は2007年度の研究発表大会で報告をいただきます。また、研究論文集にも掲載いたします。

—— イベント学会10周年記念事業アイデア募集 ——

北京オリンピックが開催される2008年にはイベント学会設立10周年を迎えます。今年度中に10周年記念事業を推進するプロジェクトチームを発足する予定ですが、会員の皆様からも記念事業についてのご提案をお待ちしています。これまでの10年を振り返り、今後の10年を見据えて、イベント学発展に寄与するようなご提案が、事務局までどしどし来ることを期待しています。

応募先

イベント学会事務局

郵便：〒102-0082 東京都千代田区一番町13(一番町法眼坂ビル3F)

E-mail : eventlgy@kk.iij4u.or.jp



イベント学会入会手続き

- 1) 入会ご希望の方は、申込書(会員種類別)にご記入の上イベント学会事務局あてご郵送下さい。
- 2) 申込者について理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金(初年度のみ、準会員は不要)と年会費を指定の口座にお振込み下さい。
- 3) これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、大会、部会などのご案内をお届けします。

■ イベント学会会費一覧(2006年度/円)

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000	10,000	個人
2) 準会員	——	2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4) 法人会員(1口)	100,000	100,000	企業、団体などの法人